

---

# 正義の味方の妹は生徒会長

疾風

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

正義の味方の妹は生徒会長

### 【Zコード】

Z4959Y

### 【作者名】

疾風

### 【あらすじ】

ある日の幻想郷。

正義の見方で有名であるチルノの妹、シルビア。そしてそのパートナーの射命丸文。二人は神からの依頼で他の世界に行くことになるが、早くもトラブル発生！？シルビアと文は別れ離れに……！そしてシルビアが転移した先にあつたのは……？

誤字、脱字、ご都合主義などがあります。原作設定を壊してしまった可能性があるので、嫌な人は読まないことをオススメします。

## 第一話 依頼（前書き）

あらすじ、キーワードでも注意しましたが、もう一度確認させてください。

これは、作者の妄想で出来上がっています。設定に変な部分があり、原作設定を無視してしまったりしていの可能性があります。それでもよろしければ、読んでください。

## 第一話 依頼

ここは幻想郷、魔光によつて暮らしている世界だ。

そこに、四人の少女がいる。

一人は正義の味方で有名である元ソルジャー、チルノ。そしてそのパートナーでこれまた元ソルジャーである、レイセン・ウドンゲイン。

さらに、正義の見方の妹で元ソルジャー、シルビアと元新聞記者である射命丸文。

この四人は一組に別れ何でも屋を営んでいる。主な組み合わせはチルノとレイセン、シルビアと文という組み合わせだ。

そして、シルビアと文の方にある依頼が来ていた。

その依頼は、森羅の社長・八雲紫からだつた。

そんな珍しい人からの依頼に、一人は戸惑いながら、内容を聞きに紫の下に訪れていた。

「なんですか、社長」

「ああ、来たのね。じゃあ早速依頼の内容を話すわ」

シルビアと文は社長室に入り紫に声をかけ、紫はぐるりと椅子を回し二人に向き合い依頼の内容を話し出す。

その内容を、二人はとても細かい所から全て聞かされた。

依頼の元はとある神様で、自分が管理している世界に上司、つまりは自分より位が高い神様の事なのだが、その上司により自分とその世界の人間では対処しきれない事態が発生した。この事態はまだ数年は大丈夫だが、数年もすれば本当に対処できなくなってしまう。そこでその神様は人外と人間が共存する世界、幻想郷に、そしてそこを作った八雲紫に助けを求めるらしい。

そしてその依頼内容を聞いた二人はベタな展開だなと思っていた。

二人は最後に、チルノたちと依頼をやらしてくれと言つた後、森羅の建物を後にした。

「はあ！？ 依頼で他の世界に行くうーー？」  
「つ、姉さん五月蠅い！」

森羅の建物がある町外れの荒野、シルビアと文、そしてチルノとレイセンは四人でやる最後 はしばらくの別れになる為 のモンスター退治に来ていた。

「他の世界つて……大丈夫なの？」

「ええ。依頼の内容はよくヒーロー小説にあるような話だつたし、何とかなるわよ。きっと」

「そりはいっても……つー」

「ー、どうやら、この話は後になるみたいね……シルビア、チルノ！」

レイセンと文は先行し、歩きながら話していると、依頼対象であるモンスターを発見した。

レイセンは愛用の銃を出して警戒し、文はシルビアとチルノを呼んだ。

シルビアとチルノは文の方に目を向け、モンスターを視界に入れた後、自分が持っている武器を手にした。

四人はアイコンタクトをした後、頷きあう。そして、シルビアとチルノが飛び出した。

先手を打つたのは、チルノだった。チルノ達に気づいたモンスターが振り向く前に、チルノは自分の剣を命いっぱい振り下ろした。チルノの剣は頑丈で、斬るというよりも碎くといった方があつて

いる。そしてチルノ自身の力も入っている為、弱いモンスターなら、これだけで終わる。強いモンスターとしてもそれなりのダメージが与えられる。

だが、このモンスターはダメージを受けた様子もなく。ケロッとしていた。

次のシルビアの攻撃を受けても、さつきと様子は変わらない。シルビアの刀は、チルノの剣とは逆で切れ味に特化した刀だ。切れない物など少ししかない位の切れ味だ。そして、とても頑丈である。

チルノの剣に比べれば劣るが、ゴーレムを斬つてもひびすら入らなかつた刀なのだ。

その、どのモンスターを斬つてもひびすら入らなかつた刀が、このモンスターを一回斬つただけでひびが入つてしまつた。それは、このモンスターの頑丈さを物語ついていた。

現に、後ろから文とレイセンが弾幕と弾丸で援護しているが、それすらもはじき返してしまい、チルノの連撃にもびくともせず、新しく出したシルビアのナイフまで折つてしまつていた。

「ちょっと、なんなのよこいつ。全然攻撃が聞いてないじゃない！」

「そ、そんなのあたいが知る訳ないだろう！？」

「うるさい！ 口より手を動かしなさい！！」

「そういう事よ。痴話喧嘩なんてしてないの」

チルノとレイセンが喧嘩を始めそうになつたのを文とシルビアが止める。シルビアは一人にちよつかいをだしながらだが。

その言葉を聞いた一人は顔を赤くして反論するが、すぐにモンスターに向かつた。

「姉さん！」

「おう！ ……ブレイク！！」

「ヒングージー！」

「」のままじや埒があかないと思つたシルビアは、チルノに声をかける。

チルノも同じことを考えていた為、一人はすぐに行動に移した。チルノは剣を？に振り、叫ぶ。すると背中に薄い氷の羽が出てくる。

シルビアはあるカードを懷からだし、叫ぶ。すると水が纏つた槍が出てくる。

「先行くよー！」

チルノがそう言つと、チルノの剣、バスターードチルノソードから当たり剣以外の剣が敵に向かっていく。

「奥義！ー！」

そして、自分で作つた氷の足場で移動しながら剣を構える。

「氷華？咲！ー！」

足場から飛び、剣を振り下ろす。

この場にいた誰もがこの攻撃は通つたと思っていた。だが、現実は違う。

「「「「なーーー？」」」

モンスターはチルノの攻撃を受けてもびくともしていなかつた。それでも、ほんの少し体に跡がついていた。そう、ほんの少しだけなのだ。

チルノの奥義でもダメージをあまり負わせる事ができなかつた。

「つ！ 姉さん、 どいて！！」

このままではまずいと感じたのか、 シルビアは大声を上げてチルノに引くよう言つた。

チルノはその言葉に従い、 モンスターを蹴つて離れる。それと同時にシルビアが槍を持ち直し走る。

相手は特に動く様子もなく、 シルビアの攻撃は簡単に通つた。今まで通らなかつたのが嘘みたいに、 シルビアの槍は敵の体をいとも簡単に貫いた。

槍は貫通する事無く敵の体の内部でピタッと止まる。

そして、 モンスターを方から何かが解除されたような音がなる。それと同時に、 モンスターは白く光り始める。

「しまつ……！」

「！ シルビア！」

「お、 おい！ 文！」

シルビアはその事にいち早く気づき、 槍を抜いてモンスターから離れようとするが、 槍はピクリとも動かない。

文はシルビアを助けようとし、 モンスターとシルビアに近づく。文の足は幻想郷最速。 だが、 動くのが少しだけ遅かつた。

シルビアの下に付き、 手をとつたはいいが、 逃げる暇もなく、 文も白い光に包み込まれた。

チルノとレイセンも駆け寄ろうとしていたが間に合わず、 锐い光に目を閉じるしかなかつた。

光が消え始め、 漸く目があけれれる頃になつた時、 モンスターは消えていた。

そしてそこには、 シルビアと文の二人の姿は、 見えなかつた。

「ん……（つめ、たい……？）つ……」

シルビアは、体を冷やす何かで目を覚ました。

目を開けると、どうやら路地裏のようで、道は狭く、自分が冷たいと感じたのは雨だという事を知った。

だが、シルビアは戦闘中に敵の攻撃に巻き込まれた筈なのだ。何処かのベットならまだしも、外、しかも路地裏にいることなんて絶対にありえない。

しかも、隣には自分と同じ髪色をした小さな女の子が寝ていた。なにか小さなコートのような物に包まって、しかし寒さを防げていないのか小さく震えていた。

このままでは凍えてしまうだろうと思つたシルビアは、何時も持つている鞄から暖かい物を出そつとした。

だが、手を伸ばした先には何もなかつた。

「……え……」

腰に何時もつけている鞄がないことに気づいたシルビアは、バツと自分の手を伸ばした先を見る。

そこには何もなく、あつたのは小さくなつていた自分の手だけだった。

「嘘……」

シルビアは一度、自分の体を見た。

着ていた服は小さく、白いTシャツと紺色の短パンという何時もとは全く違う服。足は裸足で、小さくなつていた。地面は、何時も

より近くなつた。

でも、水溜りに映る顔は、全く一緒だつた。

この事実が、シルビアにとつては受け入れられなかつた。

『……さん……シルビアさん、聞こえますか？』  
「つ……」

その時、突然声が聞こえた。

シルビアは驚き、警戒しながら周りを見渡す。

『聞こえてますね。よかつた』  
「……もしかして、神様？」

また声が聞こえた。

周りを見てもいい限り、この声は頭に直接聞こえているのだろうと思つたシルビアは、こんな事が出来るであろう人物？の名を言う。

『はい、あつてます。あと、私の声は貴方にしか聞こえませんので、心で思つてくださいればこちらも分かります。そして、早速ですが本題に入つてもよろしいでしようか』

『ええ、いいわ』  
『ではまず謝罪から。すみませんでした』

本題に入つて早々謝られたシルビアは、困つてしまつた。どうして自分が謝られたのか想像がつかないからだ。

『本来ならば元の姿、服装で二人とも同じ指定された場所に転移させていただく予定でした。そして数年間ここで修行してもらい、事態の対処に向かつてもう筈だつたのです』

『筈だつた？』

『ええ。貴方方が最後に行つた依頼の時のモンスターですが、そのモンスターに強制転移されてしまつたようです』

『……』

『何とか途中で転移権を奪い取ることに成功しましたが、あなた方の姿ではなく、子供の姿になつてしまつたのです』

『……だったら、どうして私はこの服を着ているの？ 普通だつたら服はそのままで転移するはずじゃ……』

『つ……それは……』

シルビアの疑問に、神様は「もつてしまつ。」  
が、数条もすると、思い口調で話し始めた。

『……そこには本来、違う人間がいたんです。名前は美空といいました。その子は元々体が弱かつたらしく、親に雨の中捨てられ、妹に自分のコートを着せ、凍え死んでしまいました。ほんの、数分前に……』

『なんですか？』

『そして、私達神は、死んだ人になぜ自分は死んだのか説明しなくてはなりません。その時私は貴方の転移先で悩んでましから、表情に出てしまつたのでしょう。その子供にこういわれました。【何を悩んでいるの？】と』

『……』

『その時、私はつい話してしまつたのです。それを聞いたその子は、じゃあ私の位置を使つてよと、軽々しく言いました。本当にその意味が分かっているのかを聞くと、その子は嬉しそうにいいました。【私には妹がいるの。その妹は正直暗くてさ、誰かが傍にいないと駄目だと思うんだよね。だからさ、神様が悩むほどその人はいい人なんですよ？ だったら、私の変わりに、ううん。代わりじゃなくとも妹を愛してくれるかもしれないじゃん。だからさ。私の場所、

使つてよ】つて、言つて、くれたんです……一これじゃあ……神様、失格ですよね……』

神様は泣きながら話した。悔しそうに話してくれた。

シルビアの頬には、涙が流れていった。

あつた事の無い自分を信じてくれた少女、あつた事のない自分に妹を頼んだ少女。

その全てが、シルビアにはまぶしく思えた。

『その子さ……本当に子供？ 私よりいい子じゃない』

『そうですね……私も、そう思います』

『…………この子の名前は？』

『え？』

『だから、頼まれたからには育てないと駄目でしょ？ その子の変

わりは出来ないけどね』

『…………はい！』

シルビアは神に自分の妹になる少女の名前を聞いた。

神は嬉しそうにその子の名前を教えてくれた。

シルビアは名前を聞いた後、とりあえずこの路地裏からでよつと

考え、自分の妹、簪を背負つた。

シルビアが簪を背負い路地裏を歩いて数分。漸くシルビアは路地裏から出れた。

だが、シルビアの体力はもう限界であった。

子供の体になり、体力も力も減つてしまつた。しかも今背負つている簪とも、あまり身長が違わぬいため、余計体力を奪つて行く。足は裸足のまま歩いていて、赤くなつており、見られない状態にな

つていた。

シルビアは自分の視界が霞んでも、止まらなかつた。止まつたら倒れてしまうのが分かつていてからだろ？

その時、シルビアの前に人影が出来た。

その人は、シルビア達よりも薄い水色の髪をロングヘアしていて、薄赤い瞳を持っていた。

「……誰よ、あんた」

「大丈夫？ 貴方達、びしょ濡れじやない。それに足も……」

女性はシルビアの質問を無視して、逆に訪ねてきた。そして、手を伸ばしてくる。

本来、シルビアは人を見る目があるので、体力もなくなつていて、思考力が低下していた。だからか、シルビアは心配してくれた女性の手を避け、また歩み続けた。

だがとうとう体力が付きてしまい、倒れてしまった。

（あ～、本気でやばいかも……）

「あ～もう一……た……ちよつ……」

最後に聞こえたのは、さつき自分達を心配した女性の声だった。

## 第一話 依頼（後書き）

2作品目になります。

前のはいろいろと変になってしまったのでしました削除しました。  
読んでくださった方、こちらの勝手な都合で申し訳ございません。

## 第一話 更識楯無（前書き）

ついやく第一話の投稿です  
一話と違い、とても短いです

## 第一話 更識楯無

ある畳が何畳も敷き詰められた部屋に、シルビアと簪、そしてシルビアたちを心配した女性はいた。

シルビアの足には包帯が巻かれており、簪は外にいた時の様に凍えた様子はなかつた。

女性は一人の頭をなでながら、親が子に見せるような顔で微笑んでいた。

もし、シルビアたちの関係を知らなければ、それは微笑ましい親子の風景に見えただろう。

そして女性が一人の頭をなで続けて数分後、シルビアは目覚めた。

「ん……ううん……？」

「あら、起きた？」

「…………つっ！？」

「だーめ。まだ寝てなさい

シルビアは寝惚けているのか、女性の存在に気づいてはなかつた。しかし、女性が声をかけて数秒もすると女性の存在に気づき、慌てて起きようとする。だが、女性は起きようとしたシルビアの肩に優しく手を乗せ、また寝かした。

「あ、あの、ここは……？」

「ん？ ああ、ここは私の家よ」

「そう、ですか……」

シルビアが女性に問い合わせ、女性が答える。これで会話が一応成り立つたが、それも一度だけで、その後は話すこともなく沈黙が流れた。シルビアはこの沈黙が嫌で何か話すことはないかと頭で色々と考

えていりと、隣で寝ていた簪が目を覚ました。

「む、うつと……」

「か、簪！？」

「おねえ……ちゃん……？」

「えと、その、だ、大丈夫？」

「うん……」

「そ、そつかあ。あ、寒くない？」

シルビアはすばやくもう一度起き上がり、簪の近くに行く。足に包帯が巻いてあり少し動きにくかつたが、そんな物お構い無しにと簪に近づいた。

シルビアは、簪の近くに行つた後すぐに、どんどんと何処か悪いところはないか聞いた。

シルビア。転移し、さらに幼児化した後すぐに一人の人間の姉になつた妖精。自分が元々妹な為、正義の見方で姉のチルノや園で世話になつた上白沢慧音先生、森羅で世話になつたレティ、喫茶店？7番街中央通り上海喫茶天国？略して？中国？の店主、紅美鈴。その他もうもろと姉的存在がいた為、妹との接し方にはそこまで困つてしまなかつた。それでも、初めての妹という事でとても心配性になつていただ。

何回か質問をし、落ち着いてきた所でシルビアと簪はずつと傍にいた女性に向き直る。

「あ、ありがとうございます。その……助けてもらつたし、妹を温めてくれたりしてくれて」

「いえいえ、どういたしまして。私は更識楯無つていうの。よろしくね、美空ちゃん、簪ちゃん」

「えー？ど、どうして私の名前を……」

女性、更識楯無はなぜかシルビアが変わる前の女の子の名前をしつていた。

簪の名前はシルビアが呼んだ為知つても不思議ではないが、美空といつ名前はまだ一回も言つていない為、楯無は知らない筈なのだ。だが、楯無は知つていた。

「まあまあ、そんな事置いといて  
「そんな事つて……」

楯無のその台詞にシルビアは苦笑いをした。

そんな時、笑つていた楯無の顔が急に真剣な顔になる。  
それを見たシルビアは背筋を伸ばして姿勢を直した。

「そんなに改まらなくてもいいんだけど……本題に入るけど、いい  
かしら？」  
「は、はい」

シルビアは緊張し背筋を伸ばしたまま、次にどんな言葉がくうの  
か待つた。が、いつまで経つても楯無から言葉は聞こえなかつた。  
その楯無本人は、目を左右に動かしたり、人差し指で頬をかいた  
りして、落ち着いていない様子だつた。

「あ、あの……」  
「へー？」「じめんなさい。その、えつと、わ、私たちの子供になつてくれないかしらー？」  
「「え」」

シルビアと簪は一度互いに顔を見合させた後、もつ一度楯無の方  
を向き

「ええーーー？」

叫んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4959y/>

正義の味方の妹は生徒会長

2011年11月30日19時46分発行